

研究

堅田街道に残る石幢 (山)

道のべの六地藏塔

会員 山田 善 市

人間の生活の中のカラクダは、何時の間にか消えてなくなりますが、石だけは残る。六地藏もその通り、今も尚昔の姿を残している。私は先ごろ、堅田に残る六地藏塔八体について調べてみた。

地藏菩薩は、庶民の生活の中にとけこんだ仏で、だれにもなつかしまれる仏である。住家の庭先、村の出入口、辻、田畑のすみ、峠の道のべ、お墓場、子供の遊び場、憩いの広場、所まらわず、いたる所に安置されている。真に庶民生活の中で、人間と共に生活し、共に悲しみ共に喜ぶ仏は、地藏菩薩を除いては他にあらまい。したがって、数に於いても第一である。

地藏様のお姿は、菩薩でありながら何のかざりもつけない、頭は丸く剃った比丘形で、ただ袈裟と衣とを着用しているだけで、普通の僧侶とかわりない。このお姿は誰もが親近感をもち、近づき安さを感じるのだから。左手に宝珠を持ち、右手に輿願印をむすぶが、鋤杖を持って立っているか、または坐っているか。これが普通でどこでも見かけられるお姿であるが、あいだに日色々な持物を持ってゐる地藏様もある。しかしいづれも平凡な姿である。

地藏菩薩の出現は、釈迦入滅後、弥勒仏が五十六億七千万年後に現われるまでの、無仏時代の五濁の世に出現

して、六道の衆を救うためである。五濁とは、この世が墮落すると、五つの悪い現象が起る。

劫濁 (飢饉・悪疫・戦争などの災害)

衆生濁 (人々が悪事をばたらく)

煩惱濁 (愛欲が盛んで、争いが多いこと)

見濁 (正しい教えがおとろえ、不正が栄える)

命濁 (寿命が短いこと)

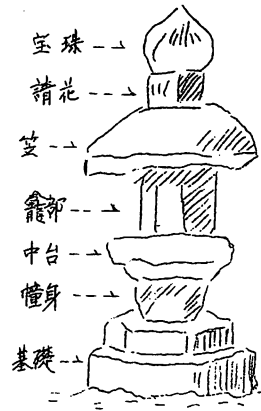
こうした世の中に現れて、人間を救うというので、まことには有難い仏である。

地藏の地は大地のことで、大地は万物を生む偉大な力を蔵している。地藏菩薩はすべての衆生を救済する偉大な力を蔵しているのは大地の根だということから、その名が起ったということである。仏典には、この功德を現わすため、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六道に姿と示現して、永久に苦しい六道の衆生を救済しようという六種の地藏の示現である。

かくて地藏菩薩は、現世利益をうたう中で、死後の世界に迷う者の罪障を救い、解脱へ導く菩薩として信仰されるのである。とくに子を失った母親には唯二の頼る仏として信仰され、愛児の使用したよだれかけを掛けて、なき我が子の冥福を祈る母の多いことか。交通事故ゆいの遭難などは、其の場所に地藏菩薩を造立して、その冥福を祈ることは今も尚行なわれている。

地藏菩薩が日本に出現したのは、平安時代といわれる。平安末期になると、六地藏が出現し、色々な地藏ができて、庶民の心の中に生き、あらゆる希望をか立ててくれる信仰対象として造立される。それ故に地藏菩薩は皆、庶民の一人一人の心のこもった仏として、庶民の手で造立されている。

(江国寺の石幢)



(一) 江国寺の六地藏塔

江国寺の六地藏塔は、昔からここにあったもので、音堂前に安置されて、前庭の風景の中にとけこんでいるこの塔は、禅寺らしい落着きのみ

せている。しかしこの地藏塔は、昔からここにあってたもので、津志河内村から柏江村を通り、泥谷村を結ぶ道がある。その路傍、速川神社下に祀られていたのはあるまいか。そこには宝蓋印塔の塔身も残っていた。地藏も祀られていた。

この六地藏塔の造立年月日は不明、宝珠・宝蓋・龕部・中台・基礎は揃っているが、幢身はありおわせのものを使用して、全体の姿は調和を欠くのはおしい。中台及び基礎の穴の形が六角であるので、幢身は六角柱であったことがわかる。石幢の高さは一丈六尺である。龕部は六角柱で、六面に六体の諸仏が浮彫されている。二体は、宝性地蔵と鶏籠地藏であるが、残る四体は風化によって何地藏であるか判明しない。

(二) 下城、山王社下の六地藏

川原村から下城村に通ずる道路に面した、城八幡社の下にこの塔があった。地藏や石幢は、明治初年の廢仏毀社の時に移転されて、下城貝塚のある五段畑の奥、山王社の下の庵屋敷に祀られた。ここに六地藏がある。龕部のみ残っているが年代は不明、高さ三十七尺、周り一、二五尺の八角形で、凝灰岩の八面にそれぞれ閻魔王二体と、六地藏を刻んでいる。静かな林間に、信者の

供えたはなが、さびしげに立っている。

(龕部に彫られている諸仏)

鶏籠地藏(延命) 地持地藏 宝性地蔵

閻魔王 法印地藏 金剛宝地藏

法住地藏 閻魔王

(三) 西野、地藏の元の六地藏

昔の堅田街道は、泥谷村の沖を通り、堅田川スダの水瀬を渡り、佐土原村を経て、西野村に収めていた。

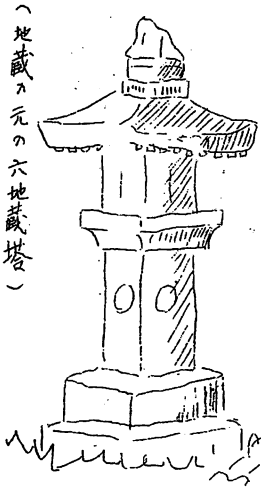
西野、地藏の元は、この街道にそうた地家である。地藏があるののでついた村名であろう。何百年を経た大樹の下に立つ高さ二、三尺の石幢が六地藏である。(梅園)

そこには石地藏や庚申塔も同居している。佐伯市指定文化財の、天正四年(一五七六)造立の庚申塔もあり、信仰の聖地であり、道行く人のためには、慈い場としてもかつこうのところである。

この六地藏の造立年月日は不明、基礎は近頃補修したものであるが、幢身から上部は昔のまま、龕部は垂木まで刻み出したりつばなしの形である。龕部は三十三の立方形で、四面に二体づつの仏像を刻んである。塔の高さは二、三尺ある。幢身には四面に樹子と刻み、ウン・タラ・ク、キリ・ク、アクの四字がある。龕部自身がバシで、これを金剛界の五仏という。

六地藏に閻魔が同居しているのは、どうしてであるか。

同様に、閻魔大王は、地藏菩薩



(地藏の元の六地藏塔)

の化身として、一たん地獄に落ちた亡者を救うという一面をもつ大王であるというから、同席してゐるくはな

龍部四面地藏名

(北)	(西)	(南)	(東)
法印地藏	閻魔大王	金剛願地藏	宝性地藏
法性地藏	閻魔大王	金剛宝地藏	鷄龜地藏

幢身部四面 (金剛界 五仏)

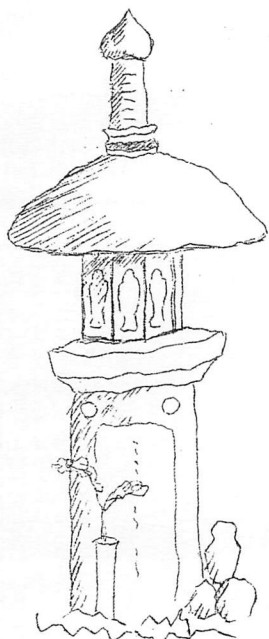
(北)	(西)	(南)	(東)
阿弥陀如来	阿弥陀如来	宝生如来	阿闍如来
阿弥陀如来	阿弥陀如来	宝生如来	阿闍如来

(四) 西野村、お塔の六地藏

西野村から苅坂村に通ずる道の辺にお塔がある。昔こ

ころは、天高く齊えた老杉があった。樹令七百有余年、

周囲一〇以余、私達は「お塔の一本杉」



西野お塔の六地藏

といつてしたしんでいた。それが、昭和五年八月十二日の暴風雨に、おしくも倒れた。旧友を失ったように、私達はがっかりした。

今は後継の三本杉が成長している。そしてこれと並んで、目通り三筋もある大まきが茂っている。

これらの木の下かげに、六地藏をはじめ多くの塔が、集団をなしている。記念碑、一石一字塔、庚申塔、佐伯惟治父子の墓、地藏寺造立立札、それらの塔は、佐伯惟治父子の哀史や、西野村綾星霜の庶民の歴史を物語っている。

さて六地藏塔は、高さ二尺三〇、宝珠・相輪・請花の下笠はまんじゅう形で、その直径は一尺五寸ある大きなもの、龍部は八角の各面に、閻魔大王二体と、地藏菩薩六体の浮彫りがある。長い間の風雨に浸蝕されて、何地藏か判明しないものもある。

中台の下の幢身は高さ八十センチあり、上方の左右に日月と彫り、中央には文字らしいものがあるが読めない。どうも庚申塔らしい。それならば佐伯地方には珍らしい六地藏庚申塔である。

(龍部の八面の諸仏)

(東から)

- 宝性地藏
- 宝印地藏
- (不明)
- 法性地藏
- 閻魔大王
- 頭蔵大王
- (不明)
- 鷄龜地藏